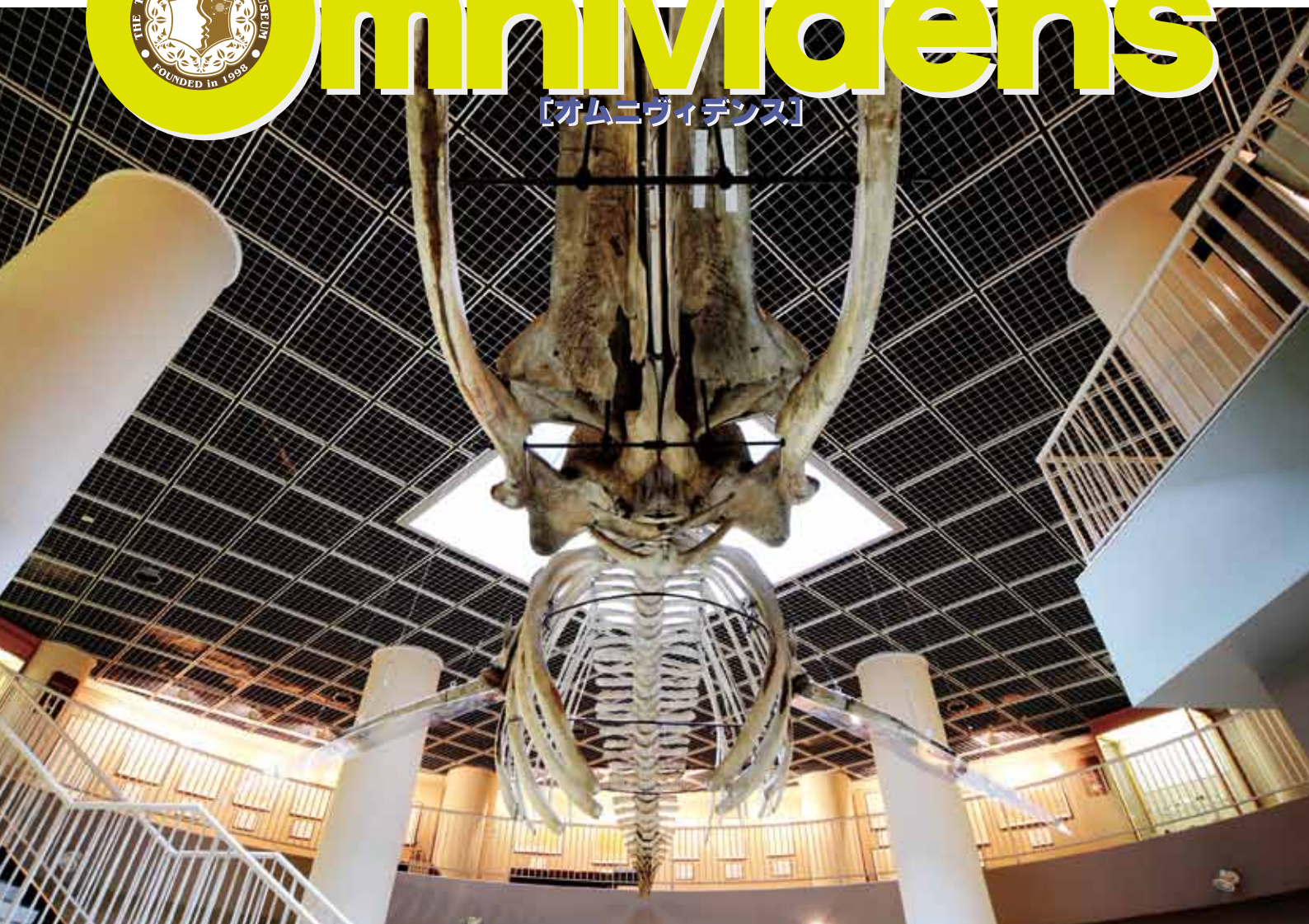


omnividens

【オムニヴィデンス】



イワシクジラ全身骨格

Balaenoptera borealis

現生、長さ14m

クジラの漁港として有名な宮城県鮎川町(現 石巻市)で1915年に陸揚げされたクジラです。現在は捕獲が禁止されている種類。理学部自然史標本館の展示室の天井から空を飛ぶように吊るされていて、来館者の人気を得ています。今年3月の東北地方太平洋沖地震では、大きな破損はなかったものの、揺れて全体の組み立て姿勢が崩れ、片方のヒレの亚克力板が壊れました。その後本格的に修復と点検工事を実施し、肋骨とヒレ部の組み方を改善して、いっそうの雄姿へとよみがえりました。

下の写真は津波の被害を受けた鮎川の町の様子(4月撮影)。東北大学総合学術博物館では鮎川のおしかホエールランドでの文化財救援活動も実施しています。



2011.7
NO. 39

「魚竜館被災す。救援を請う。」

— 東北大標本救難隊活動報告 —

魚竜館誕生

南三陸町歌津周辺は、3種類の時代の異なる魚竜化石が産出する、世界でもまれな魚竜化石産地である。昭和27(1952)年、志津川細浦のジュラ紀の地層から日本最初の魚竜化石としてホソウラギョリュウが発見された。昭和45(1970)年には歌津館崎に分布する中生代三畳紀前期の大沢層より世界最古のウタツギョリュウが、さらに昭和60(1985)年には歌津管の浜の三畳紀中期の伊里前層よりクダノハマギョリュウが発見されている。

魚竜館は、平成2(1990)年、ふるさと創生事業の拠点として建設された。1階では眼前に広がる伊里前湾から採れる新鮮な海産物を提供し、2階展示室ではウタツギョリュウ、タイ産魚竜(三畳紀前期)、クダノハマギョリュウ、ベザーノギョリュウ(三畳紀中期)、カナダ産魚竜(三畳紀後期)、ドイツ産魚竜(ジュラ紀前期)を展示する世界的魚竜化石産地にふさわしい観光と文化の複合施設となっていた。

魚竜館被災

2011年3月11日14時46分、宮城県牡鹿半島沖を震源とする地震は、日本の観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、地震による大津波は東北地方から関東地方の沿岸域に壊滅的な被害

をもたらした。南三陸町歌津でも、震度6弱の激しい揺れに続いて襲った津波は、住宅、国道、橋、港、鉄道と町のすべてを押し流している。魚竜館の高橋司館長は、本震直後に従業員と背後の高台に避難して無事だったが、津波が第一波、第二波と次々に重なりながらせり上がり、最後には魚竜館の屋根をはるかに超える高さには達して魚竜館を呑み込むようすをただ見ているしかなかった。

標本救助

津波から2週間後、流失を免れた展示標本の救援を求める高橋館長の声が報道された。東北大学総合学術博物館では、この館長の求めに応えるために救難隊を編成し、仙台市内のガソリン事情が回復した4月4日に魚竜館を訪れ、多くの資料標本の無事を確認した。同13日には、東北大学埋蔵文化財調査室員、宮城県文化財課員、文化庁文化財レスキュー担当者も同行し、高橋館長立会いのもと、化石標本、埋蔵文化財、民俗資料を救出し、東北大学へ搬入、さらに18日には、館内に残した大型標本の保護処置をして、現地作業をいったん終えた。東北大学総合学術博物館は、その後も文化庁文化財レスキュー宮城の自然史標本担当として、おしかホールランド、マリノバル女川、岩井崎プロムナードセンターと救援活動を継続している。



落下した2階展示室の天井

自然史標本の公的価値

ところで、文化庁文化財レスキュー事業が救援対象とする自然史標本とはどのようなものだろうか。文化財保護法によると、文化財に含まれるのは、「わが国にとって学術的価値の高い動植物標本や化石標本など、いわゆる記念物」とされている。ウタツギョリュウ化石は魚竜の初期進化を示す、学術的に重要な標本であることから、昭和48(1973)年、産地と合わせて国の天然記念物に指定されている。それ以外の自然史標本はどうだろうか。現在おこなわれているレスキュー事業では、ほとんどの自然史標本は救援対象に含まれておらず、公的価値のある標本として認められていない。この自然史標本についての認識は、災害時の救援活動ばかりでなく、普段の保存活動の学術的意義をもあいまいなものにしている。

しかし実際には、自然史標本の多くには研究結果を担保する重要な役割がある。くわえて空間的、時間的に異なる様相を示す自然物を対象とする自然史研究では、文化財に含まれる少数の標本だけでなく、それ以外の多数の標本との比較が重要な研究方法として確立している。それゆえ、自然史標本はひとつひとつ



魚竜館周辺の被害状況

つ、仮想的な学術コレクションのなかで相互に関連づけられ位置づけられている。しかし、このような学術コレクションは、ほとんどの場合、少数の研究者しか利用できない。ここに自然史標本保存の抱えるさまざまな問題の原因があるように思われる。

現在、各地の博物館や展示施設の所蔵標本を横断的に検索できる情報シ

テムが検討されている。多くの人が利用できる標本情報システムへの登録は、自然史標本の公的価値の担保になるばかりでなく、災害時の標本救援にも役立つ情報となるのではないだろうか。

結語にかえて

実際の救援活動では自然史標本ばかりではなく、レプリカや模型、展示ラベル

なども重要な資料として回収している。これらの資料や模型は歌津の文化活動の歴史資料であり、この大災害の記録でもある。被災標本の救援活動には一定のめどが立ってきた。これからは、これらの救援した資料標本をどのように地域の次の世代に引き継ぎ、復興に役立てていくかを考える段階に来ている。

(文章：佐々木理 写真：根本 潤)



散乱した2階展示室の標本



高橋魚竜館館長(右から2番目)と標本救援チーム

第6回博物科学会 in 名古屋大学参加報告

名古屋大学東山キャンパス・野依記念学術交流館を会場として、6月23日(木)、24日(金)の2日間にわたり、大学博物館等協議会2011年度大会および第6回博物科学会が開催されました。

総合学術博物館からは柳田俊雄館長、佐々木理、小川知幸、そして事務担当として佐藤孝志の4名が参加し、佐々木と小川がそれぞれ口頭発表とポスターセッションの場において、東日本大震災にかんするレスキュー活動と被災・復旧状況について報告をおこないました。

今回の博物科学会研究発表では、パワーポイントを使用した口頭発表が22、ポスター発表が13と、昨年度(各24、17)にくらべれば、数としてはやや減少しましたが、事前登録の大会参加者は99名で、ほぼ昨年どおりの活況を呈しました。

さて、23日の口頭発表の筆頭として、佐々木が「宮城県南三陸町「歌津魚竜館」津波災害レスキュー報告」をおこないました。

この発表は、学会より特別に招待され

たもので、初めにおかれたことにより、被災地ではいま何が起きているのかという理解と、自分たち博物館関係者はそれに対して何ができるのかという気構えが全体として共有され、たちまちに学会の雰囲気支配したように思います。翌日の総会においても、今後の復旧支援、震災対応のあり方が真剣に協議されました。ただし、現在進行形で刻々と推移する状況に対して、すぐに何らかの回答を得ることはできません。われわれもまた、いまできる最善は何なのかと、つねに走りながら考えているところです。

ポスターセッションでは、小川が「東日本大震災による東北大学附属図書館・史料館の被災と復旧」と題した発表をおこないました。

小川は地震発生直後から、附属図書館協力研究員として、早期の復旧に向けた図書館職員の努力を目の当たりにし、自身も貴重図書等の被害状況を調査しています。発表では、避難誘導の経過と、これがきわめてスムーズにおこなわれたことの分析、復旧中の支援にお

ける人的ネットワークの重要性、学生ボランティアの活躍、そして今後の情報共有の仕組みをどのように整備すればよいか、という点を中心にまとめました。

被災地から離れていた人びとにも、また被災者同士であっても、被災の実態をどれだけリアリティをもって感じとることができるか、これが始まりであり終わりであると思います。わたしたちはその努力をつづけていきたいと思っています。



地震直後の附属図書館学生閲覧室

世界を再構成する

オルテリウス『世界の舞台』のコンポジション
— Composition of the *Theatrum Orbis Terrarum* —



東北大学
学術資源研究公開センター
(総合学術博物館) 助教
小川 知幸

PROFILE
(おがわ ともゆき)
1970 年生まれ
専門：ヨーロッパ中世・
近世史、資料論、
出版・メディア論

手描きの海図

大西洋の海原を3隻の船団が風を受けて昂然と西へ進んでいた。なかでも旗艦サンタ・マリア号は、新造のキャラック(ナオ)船として、3本のマストと、ひときわ大きな船尾楼をそなえていた。その巨体から思うに意外なほど小さな船長室で、男はテーブルに一幅の海図を広げていた。

ポルトラーノ海図。羅針盤を模した方位盤が大洋のあちこちに描きこまれ、そこから、航路を示す無数の直線が四方八方に延びている。多くの重要な海図は官撰で門外不出だったが、この手描きの海図は船乗りの手によって筆削されてきたのだ。

その直線の一本を指でなぞりながら、男は呻吟した。

「こんな古い地図は、使いものにならん」

プトレマイオス地図

カナリア諸島のゴメラを発ってからすでに1カ月以上がたっていた。予定ではもう、ジバングがみえているはずだ。船員どものなかには、世界の果てに差しかかり、海から落ちてしまうなどと騒ぎはじめた者もいる。

テーブルのうえの、もう一枚の地図をおごそかに引きよせた。友人のトスカネリが、プトレマイオスの地理学書 (*Geographia*) の最新の研究から導きだされたものだといって、書簡とともに彼に送った地図だ(図1)。この地図がなければ、彼は5年にもわたりスペイン王室を説得する気にはならなかっただろう。プトレマイオスは古代ローマの学者であったが、地球のうえに座標を打つことを教えてくれた。そこに示された8千もの地点の座標は、この世界の正確な位置と大きさを表すものであった。

地理的発見

地図はアラブからイスラームの手をへてヨーロッパにやってきた。これはアジアから吹いた風なのだ。アジアの風に乗ってアジアに到達する。何の不思議があろう。

甲板が騒がしくなってきた。航海士が一人、まろび転びつ駆けこんできた。

「カピタン、陸影です！」



アブラハム・オルテリウスの肖像
(ハイデルベルク大学図書館蔵)

計算通りではないか。プトレマイオスは正しかったのだ。われわれは西回りでインドに到達した。そうだ、ここをサン・サルヴァドルと名づけよう。聖なる救世主の意だ。そして十字架を立てよう。槍のように重い、鋼鉄の十字架を。わが名はクリストバル・コロン。みなはこう呼ぶだろう。

世界観を変えたコロンブスと。

新大陸アメリカ

—80年後。コロンブスはその後も3回の航海をはたしたが、自分が到達した陸地はインドだと言い張りながら衰れな晩年を送った。コロンブスの知友アメリゴ・ヴェスプッチが、同じく西回りの探検事業をすすめるうちに、そこが未知の大陸、つまり新世界 (*Mundus Novus*) だと確信した。彼は航海記を出版して、広く受け入れられた。そして地図製作者のヴァルトゼーミュラーがこれを探りいれ、アメリゴのラテン語形アメリクス (*Americus*) から、はじめて新大陸を「アメリカ」と呼んだのである。※

それから多くの探検航海者が西へと旅立っていった。スペインのバスコ・ヌーニェス・デ・バルボア、イタリアのジョバンニ・ダ・ヴェラツァーノ、そしてポルトガルのフェル

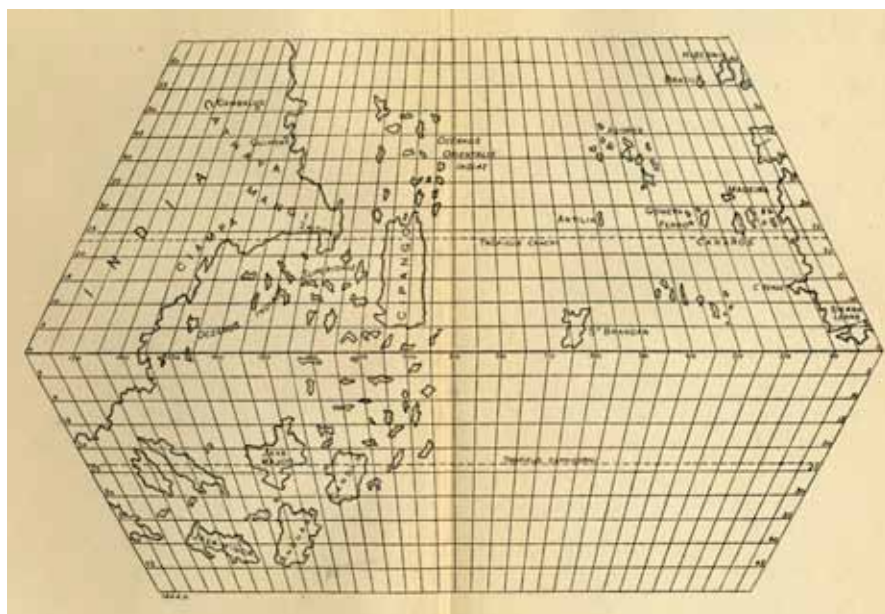


図1 トスカネリの描いた地図。現在のカリブ海をこえてメキシコのあたりにジバングがみえる

ナン・マガリヤニス (マゼラン)。なかでもマゼランは、南アメリカ大陸を南下し、さらに太平洋を横断し、1522年に最初の世界周航をはたして、この世界が球体であったことをはじめて経験として証明した。

ヨーロッパ人は、ようやくその小さな殻を破りてたのだ。

中世の地図

「だが」、と彼は独りごちた。彼はアブラハム・オルテルス。友人たちのあいだでは、ラテン語形のオルテリウスという名でおっている。

「北回り航路の探検は、ことごとく失敗した。そして、多くの血も流れた」

新大陸の征服は、ヨーロッパに大量の銀をもたらした。豊かさを享受しながらも、物価はおそろしく上昇した。覇権をめぐる戦乱の火蓋が切っておとされ、それはこのネーデルランドでも例外ではなかった。古いカトリックの権威がゆらぎ、宗教戦争が勃発した。スペインはカトリックの護り手として、1576年にアントウェルペンに兵を送りこんだ。その結果、数千の市民が犠牲になった。

オルテリウスは首を振った。思えば、かつて世界はもっとたんじゅんで平和だった。コスマスの宇宙図のように、こんなものが世界のすべてであったのだから (図2)。

モンストルムの再興

世界は一変した。しかし、航海者の証言によって、プリニウスや、ソリヌス、インドルスをはじめとする、権威ある古代中世の著述家たちがものした怪しげな記述が、にわかに実在のものとして認められるようになった。「怪物」がふたたび跋扈しはじめた。



図3 南米大陸に人食い族の存在をあらわす地図

たとえば、コロンブスは、第一回航海のさいに、カリブ人が「勇敢な」という意味でいった「カリバ」を、「カニーバル」と聞きちがえ、人食いの存在を確信してしまった (図3)。

また、1544年に刊行され、ベストセラーとなったセバステアン・ミュンスターの『世界誌』(Cosmographia universalis) をみれば、キュノケパロイ (犬頭人)、スキアポデス (影足人)、ピュグマイオイ (矮小人)、アケパロイ (無頭人) のようなモンストルム (怪物) たちが所せましと踊っている (図4)。

海向こうの座付き作家シェイクスピアは、1604年に「オセロー」を芝居に掛けた。

船乗りだったオセローの冒険遍歴を妻が聞きたがるという台詞に、こうある。

「人間同士互いに食い合う食人種とは、すなわちアンソロポファジャイ、さらには両肩の下に頭の生える異形の人種など、デズデモーナはそれはもう熱心に身を寄せ、こうした話を聞いてくれました」(大場建治 訳)

ルネサンスは、混乱の時代だった。

世界を再構成する

こうした確証なきものを、オルテリウスは、すべて排除した。

彼は、骨董商であった父のかたわらで、いつしか古銭や地図や古代の著述家たちの作品を手当たりしだいに集めるようになっていた。父を若くして亡くしてからは、若い妹たちを養うために、当時割がよかった壁掛け地図の彩色装飾師 (afsetter van carten) としても働きはじめた。めずらしい地図をもとめ、ヨーロッパ各地の書籍見本市をわたり歩くうちに、同郷の地理学者ヘラルド・メルカトルと出会い、意気投合した。

ルーフェン大学の高名な数学者ヘンマ・フリシウスのもとで学んだメルカトルとちがって、オルテリウスは、まったくの独学の士だった。みずから測量し、幾何学の複雑な数式をあつかうことはむずかしかった。だが、彼以上に、世にある無数の地図を見聞きし、集めたものは他になかった。新しいものがかならずともよいとは限らない。

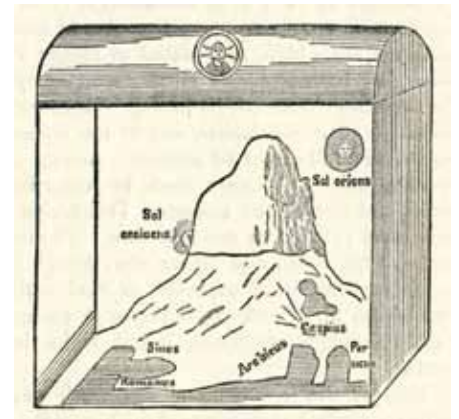


図2 6世紀の修士コスマスの宇宙図。大地は平坦で、高峻な山々が太陽をさえぎったときに夜になるとする

できるかぎり多くの地図を比較し、古典や旅行記などの記述と突きあわせながら、いまもっとも正確な地図を選びだして、この世界を再構成したいという欲望が、しだいに彼を駆りたてるようになった。

コンポジションの大系

彼がとった方法は、さまざまな地図を配置し、それらを構成要素として世界全体を組み立て直すというものであった。まさに、絵画のコンポジション (構図) に相当する。オリジナルの地図をそのまま手をくわえることなく採用して、製作者の名前を版面にはっきりと刻みこんだ。その数は、初版の87名から、最後には183名にまでおよんだ (1601年版)。わずかな箇所を差し替えて、それを自分の新しい地図だとして売りだす、当時横行していたそのような行為を、彼はゆるしがたいと考えた。こうした明確な引用によって、オルテリウスの地図は、現在の学術論文のように、開かれた大系となった。

彼はこの大系を、『世界の舞台』Theatrum Orbis Terrarum と名づけた。



図4 モンストルムの数々。自分の足で影を作っているのがスキアポデス



図5 『世界の舞台』のアメリカ大陸図(部分)。左上にアニアンの地名がみえる



図6 アメリカ大陸図(1593年版)

世界全図

まず、見開きに配置した世界全図には、畏友メルカトルの大型地図を採用した。

この地図は、赤道から離れても、任意の場所の方位がただしくなる「正角円筒図法」で描かれており、のちにメルカトル図法とよばれるようになった近代地図のひとつであった。また、当時は北方海域が未踏であったせいで、アメリカ大陸とアジア大陸を一続きとする地図が多く出回っていたが、この地図では、それらはアニアン海峡によって分離されていた。じっさいにこの海峡が発見されるまでには、18世紀の探検航海者ベーリングをまたねばならないことを、われわれはよく知っている。メルカトルの地図を採用したことは、オルテリウスの慧眼であった。

もっとも、「アニア(ン)」とは、マルコ・ポーロの『東方見聞録』よりとられた地名で、元代の中国の地名、安寧がなまったものであったのだが(図5)。

四大陸図

つぎに配置したのは、新大陸アメリカの地図である(図6)。これはセヴィーリヤの地図製作者グティエレスの地図によった。「アメリカ」という名前の生みの親、ヴァルトゼーミュラーの地図の存在は知っていたが、手に入れられなかった。

つぎのアジア大陸は、ヴェネツィアの地図製作者ガスタルディの地図にならったものであった。ここに日本も、いびつなたちであるが登場する。そのつぎのアフリカ大陸もガスタルディにしたがった。メルカトルもアフリカを描いていたが、オルテリウス

は採用しなかった。15世紀のフラ・マウロ以来、すぐれた地図を描いてきたヴェネツィアの成果を、ガスタルディのほうが、より多く採り入れていたからかもしれない。

最後のヨーロッパ大陸には、スウェーデン国王につかえたオラウス・マグヌスの地図に多くをよった。

『世界の舞台』の初版には、このように世界全図と四大陸図にくわえて、48の地方図を収録した。その9割近くが直接の引用であった(手書き地図の模写、銅版画地図の部分複製を含む)。残る1割は、複数の原図から引用して1枚にまとめたものであったが、もちろんこの場合にも、オルテリウスは、もとになった地図の製作者の名前を銘記することを忘れてはいなかった(図7)。

情報提供と改訂

ところで、彼は、『世界の舞台』の序文のなかで、読者に宛ててこう述べた。

「ここでは、とある地名が見当たらないこともあるだろうが、それは怠慢で省略したわけではない。そのような地図を見たことがなかったり、複写を入手できなかったりしたからなのだ。もしこれを助けていただけるならば、ただちにその地名をおぎない、しかるべく情報提供者を顕彰したい」

出版後、それに呼応するかのように、すぐさま多くの書簡が彼のもとに寄せられた。誤記や未入手の地図の情報、さらには手ずから描いた地図まで届けられた。しかし、カリックの枢機卿エスピノーサが憤慨していると伝える書簡を目

にしたときには、さすがの彼も肝を冷やした。

「自分の生まれ故郷マルティムニョスの名が載っていないというのだ」

不敬にあたらぬよう、丁寧に詫言を述べ、つぎの1573年の版で地名を付けかわえた。細かく彫りこまれた地名と地名のあいだに挿入するには、とりに村の名を削りとらねばならなかった。

彼は苦笑した。「俗物め」

オルテリウスの挑戦

こうして、コンポジションの大系として世界を再構成した『世界の舞台』は、初版にして320部以上、オルテリウスの没年である1598年までに2千部以上という、

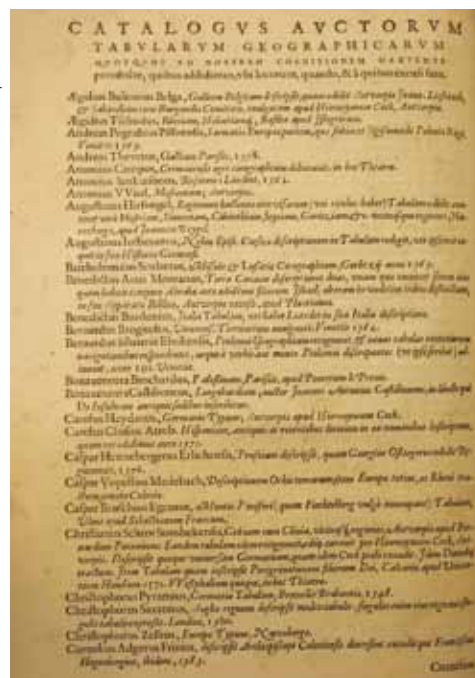


図7 『世界の舞台』の地図製作者名録(Catalogus Auctorum)

空前の売り上げを記録した出版物となった。そして、近代のスタンダードなアトラス(地図帳)を準備する土台となった。彼が生涯にわたって地図の増補改訂をつけ、最新の状態を保とうとしたことも、その売り上げの大きな要因であっただろう。

さて、いまわれわれは、『世界の舞台』を「地図帳」といった。この世界をできるかぎり正確に描きだすだけでなく、地図(絵図)を一冊にまとめること、それ自体が、オルテリウスの挑戦であった。

つまり、こういうことだ。

ひとつは、世界の「全体」を、形態にしたがい分類して、体系化したことである。そうしなければ、われわれは全体と部分の関係をみることはできなかった。

また、古典を重んずる人文学者にとって、絵図とは伝統的にテキストを補佐するものにすぎず、厳格な解釈をさまたげるとなれば、むしろ排斥したいものであった。絵図が一冊の書物となるなど論外であった。書物とは、聖書であり、古典作品であったのだ。しかし、オルテリウスはかぎりなくテキストを抑え、地図の一続きから、この作品を作りあげた。

連続した場面を並べた絵物語をフランス語でイストリエ (historié) という。人類の営為が繰り返りひろげられてきたスペクタクル(壮観)の舞台として、普遍の世界を図示する。その挑戦こそが、オルテリウスの『世界の舞台』であったのだ。

※1507年に刊行され、ひさしく失われていたヴァルトゼーミュラーの地図は、20世紀に入ってドイツのヴォルフエック城で発見され、これを2003年にアメリカ議会図書館がアメリカの「出生証明書」として1千万ドルで購入したことで大きな話題となった。

Special Thanks to Dr. Karin Zimmermann, Heidelberg University Library, Germany.

(本稿は、2010年度科学研究費補助金「若手研究B」の成果の一部である)

主要参考文献

- ①S. Münster (1550), *Cosmographia universalis*, Basileae.
- ②J. Cabot & G. Corte Real (C. R. Markham tr. 1893), *The Journal of Christopher Columbus and Documents relating to the Voyages*, London.

- ③J. Scott Keltie & O.J.R. Howarth (1913), *History of Geography*, London.
- ④P. Meurer (1991), *Fontes Cartographici Orteliani*, Weinheim.
- ⑤M. van den Broecke, P. van der Krogt & P. Meurer ed. (1998), *Abraham Ortelius and the First Atlas*, Utrecht.
- ⑥V. Virga (2007), *Cartographia. Mapping Civilizations*, New York.
- ⑦M. van den Broecke (2009), *Ortelius' Theatrum Orbis Terrarum (1570-1641). Characteristics and Development of a Sample on Verso Map Texts*, Utrecht.
- ⑧P. ズムトル (鎌田博夫 訳, 2006), 『世界の尺度』, 法政大学出版局
- ⑨伊藤進 (1998), 『怪物のルネサンス』, 河出書房新社

考古学陳列館の被害と復旧の現状

片平キャンパスにある通称赤煉瓦書庫は、宮城県でもっとも古いレンガ造りの建物としても貴重なもので、現在は考古学陳列館として活用されています。陳列館は、東日本大震災によって被害を受け、内側の漆喰が崩れてレンガがむき出しになりました。とくに3階の被害が大きく、外側も瓦の落下や外壁の亀裂がめだっています。



3階内壁の漆喰が崩落

ここには1920年頃から考古資料が蓄積されていますが、これらの資料も被災しました。なかでも重要文化財に指定されている宮城県沼津貝塚の土器2点と動物土製品1点、宮城県経ノ塚古墳の円筒埴輪1点が破損したのは大きな被害です。その他にも、完形の土器31点が転倒・落下して破損しました。しかし、前年におこなわれた展示ケースの耐震補

強の効果で、被害は比較的小さくてすみました。

現在までに、破損した土器の約半数を修復し、重要文化財については、文化庁の指導のもとで専門家に修復を委託する予定です。ただし、川内キャンパスにある収蔵庫の被害が大きいため、落下した棚や収蔵箱を整理して旧状に戻すには、長期を要すると予

想されています。建物の修復を含めれば、完全復旧にはしばらくかかると考えられます。

文学研究科考古学専攻分野
鹿又喜隆



破損した沼津貝塚の土器

東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館
I n f o r m a t i o n



理学部自然史標本館の展示室を再開しました

このたびの東日本大震災で被災された地域の方々に心よりお見舞い申し上げます。

総合学術博物館では震災の影響により、展示標本の点検および収蔵資料の保守作業のため、理学部自然史標本館展示室をしばらく休館しておりましたが、このたび作業が終了し、7月1日(金)より再開いたしました。

クジラの全身組み立て標本は足場を組んで本格的な補修工事を行いました(右写真)。粘着ゴムなどで固定していた展示品はどれも転倒せずに無傷でしたが、倒れて破損したものについては修復、補強したうえ、新たに固定を施しました。また展示ケースのガラスには飛散防止フィルムを貼りました。これらにより展示室の地震対策を強化しています。

3カ月半ぶりに再開された展示室をご観覧いただけましたら幸いです。



理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



総合学術博物館のホームページもご覧ください



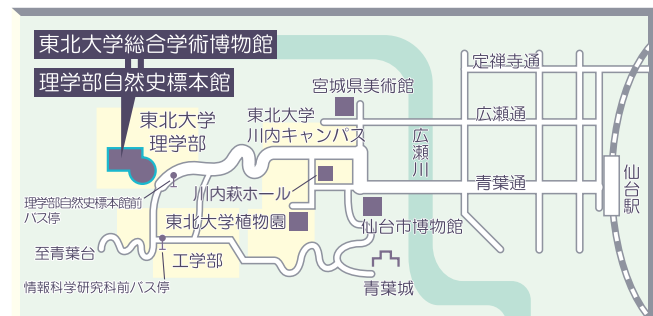
東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum

Omnividens [オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

- 仙台市営バス
(1) JR仙台駅西口バスプール9番のりばより、「青葉通-理・工学部-仙台城跡南経由 動物公園循環(719系統)」に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩1分。所要約20分。
- (2) または同じく9番のりばより、「宮教大」行きが「青葉台」行き、「成田山」行き(710、713、715系統)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩4分。所要約25分。
- 仙台市観光シティーバス
「一ぶる仙台」も利用できます